



# 町民文芸

## 只見短歌会 令和四年九月詠草

原爆より七十余年慰霊祭の映像見つつ共に涙す

馬場 八智

そよ風に揺るる三色みいろの水引草趣ありて心安まる

目黒 富子

猛暑なり日常家事に精いっぱいあれもこれもと思ひのみ過ぐ

関谷登美子

雲ひとつなき大空をわが物とばかりに飛行機尾を引きてゆく

新国由紀子

大き音響かせバイク集団で走り行きたる静かな町を

渡部ヨリ子

青葉しげる栗の大樹に陽の射して碧空の下ながく輝く

新国 洋子

(出詠順)

## 只見俳句会 九月定例会

光浴び二つ葉生る大根畝  
少人数二度走る子や運動会

一穂

汗拭くも大粒の汗子等四人  
雲の峰子等の遊びは急転回

修一

只見線歓喜の声も秋高く  
立ち止まるコーヒーの香や紅葉寺

信

けんかして涙流して心太  
夏休み宿題急ぎ無口なり

都

朝顔は雨に落され網残る  
同窓の旅は二人に冬隣

味代子

甲高い鳥の鳴き声黄金波  
青空にぶなの葉届き孫の声

真理子

## 日高俊平太 指導

朝稽古朝顔柄の棗映え  
きららかに撥きし霽墓洗い

紺青

秋立つや何処どこもきれいに村の墓  
開け放す居間もたちまち今朝の秋

礼

六十年生きてふたりの今日の月  
こおろぎや夕餉の卓の下あたり

恒夫

整理の手少しゆるめて虫の声  
断捨離の長き日になり月仰ぐ

一恵

散歩するサイダー飲んでリズム取る  
秋雨や畑仕事を一休み

睦子